

太田長作遺跡（第2次）

—鹿島川流域を吹きぬけた弥生中期の風—

囑託職員 宇井義典

遺跡と周辺環境

太田長作遺跡は佐倉市太田字長作1147-3に所在し、鹿島川右岸に面している標高約16mの台地上に立地する。台地の東側では東から西に向かって流れている高崎川があり、現在の国立歴史民俗博物館の西側で鹿島川に合流する。遺跡が立地する台地は千葉面あるいは千葉段丘と呼ばれ、約6万年前に形成されたと考えられている段丘面である。

西に鹿島川、東に高崎川が流れ、台地は北西方向に張り出した大きな独立台地を形成しているように見える。しかし、良く見るといたるところに小支谷が発達しており、細かい独立台地に分けることができる。太田長作遺跡は最も鹿島川よりの南北に細長い台地の根元近くで営まれた遺跡である。

当遺跡が立地する細長い台地は、弥生時代中期の遺跡が多く認められる台地でもあるため、無関係に遺跡が営まれたわけではなく、社会的要求のもとに成立していたことを予測させる。

発掘の成果

当遺跡は今回の調査を含め、2度の発掘調査がおこなわれた。第1次調査は特別養護老人ホーム（はちす苑）の建設に先立っておこなわれた。第2次調査ははちす苑の増築に伴うものであり、第1次調査の北側がその対象となった。発掘調査区が隣接しているため、第1次調査の成果もまとめ、台地上に展開した遺跡の様相を見てみたい。

第1次調査

1,922 の発掘調査がおこなわれ、旧石器時代石器集中地点2ヶ所、縄文時代陥穴1基、弥生時代堅穴住居跡（中期）1軒、古墳時代堅穴住居跡（前期4軒・後期3軒）7軒、古墳時代掘立柱建物跡3棟、

近世掘立柱建物跡1棟、近世溝状遺構1条が検出された。なお、調査範囲の南側は削平されていたため、遺構の検出は認められなかった。

第2次調査

2,519 の調査がおこなわれ、旧石器時代石器集中地点2ヶ所、縄文時代堅穴住居跡（早期1軒・中期1軒・不明1軒）3軒、弥生時代堅穴住居跡（中期10軒・後期2軒）12軒、古墳時代堅穴住居跡（前期5軒・中期1軒・後期6軒）12軒、奈良・平安時代堅穴住居跡1軒、土坑143基（縄文時代陥穴2基、同炉穴31基、弥生時代土墳墓2基を含む）、掘立柱建物跡8棟、溝状遺構3条などが検出された。

縄文時代 早期の炉穴が多数検出されていることが特筆される。現在のところ調査区の東側で早期に属すと思われる住居を1軒確認している。調査区全体に早期末葉の表裏条痕文の土器片が広がっており、調査区の北西側に比較的多く認められている。遺構の分布状況とは大筋で一致する。今回の調査範囲の東側で縄文時代前期の土器が検出されている。東側の小支谷を挟んだ台地上に太田・大篠塚遺跡が立地しており、ここでも縄文時代前期の土器が検出されているようである。何らかの関係が考えられよう。また、東北地方の大木式系だいぎの土器が認められるため、他地域との繋がりが考えられる。

その他に縄文時代草創期に属すと見られる石器が確認されており、同時期の土器（隆起線文土器）が検出される可能性がある。

弥生時代 住居跡の殆どが中期後半の宮ノ台式期に属している。検出された宮ノ台式土器には年代幅があるため、必ずしも全ての住居跡が同時期の所産であるとは断定できないが、中期後半の社会が展開したことは明らかである。

古墳時代 後期に属す住居跡が増加している。前期・中期のものも認められ、弥生時代から古墳時代にわたって長期に生活が営まれた様子がわかる。

遺構の展開

第1次、第2次調査の内容を見てみたが、今回の遺構の密度は前回よりも濃いことが分かる。南側に人為的削平の可能性があることや台地の根元付近であったことを考慮しても、台地中央や縁辺に集落が展開する傾向があると考えられよう。その様な傾向は、資源、日当たりといった周辺的环境的な要因も作用していると考えられる。

各時代の状況を見ると、特に縄文時代、弥生時代の遺構が増加しており、活発な営みがあったものと解釈できよう。

弥生時代のイメージ

弥生時代という大陸から伝播してきた水田稲作、小国（クニ）による群雄割拠の時代、畿内あるいは九州を中心とした中央集権社会への過渡期という、この時代を印象付ける出来事を想像するであろう。これは日本列島全体を覆いつつあった、激動する弥生社会の一面を捉えたに過ぎず、日々の生活の営みからすると大きな隔りがある。しかし、生活様式・生活形態を変えた稲作文化の受容によって、階層差や貧富の差が生じたとされるため、それらは密接不可分なものであり、日常生活に反映していることは言うまでもない。

大陸から北部九州に伝わったとされる稲作文化は、かなり早い段階から受け入れられていたようである。そして、**遠賀川系**土器と共に日本海側伝いに東北地方に至ったわけであるが、青森県砂沢遺跡では弥生前期の水田跡が確認されている。

その頃、下総台地では荒海式と呼ばれる、土器の器面に条痕文等を施した土器が用いられていた。中期前半になると**出流原式**・池上式土器、後半には宮ノ台式土器が用いられる。後期になると印旛郡周辺では北関東、南関東それぞれから影響を受け、独自のスタイルを確立する。それを「印旛・手賀沼系式（**印手式**）」、「白井南式」と呼んでいる。弥生時代に

限らず下総台地は北と南の文化の坩堝と化しており、折衷的あるいは独自の文化を営む傾向が認められる。

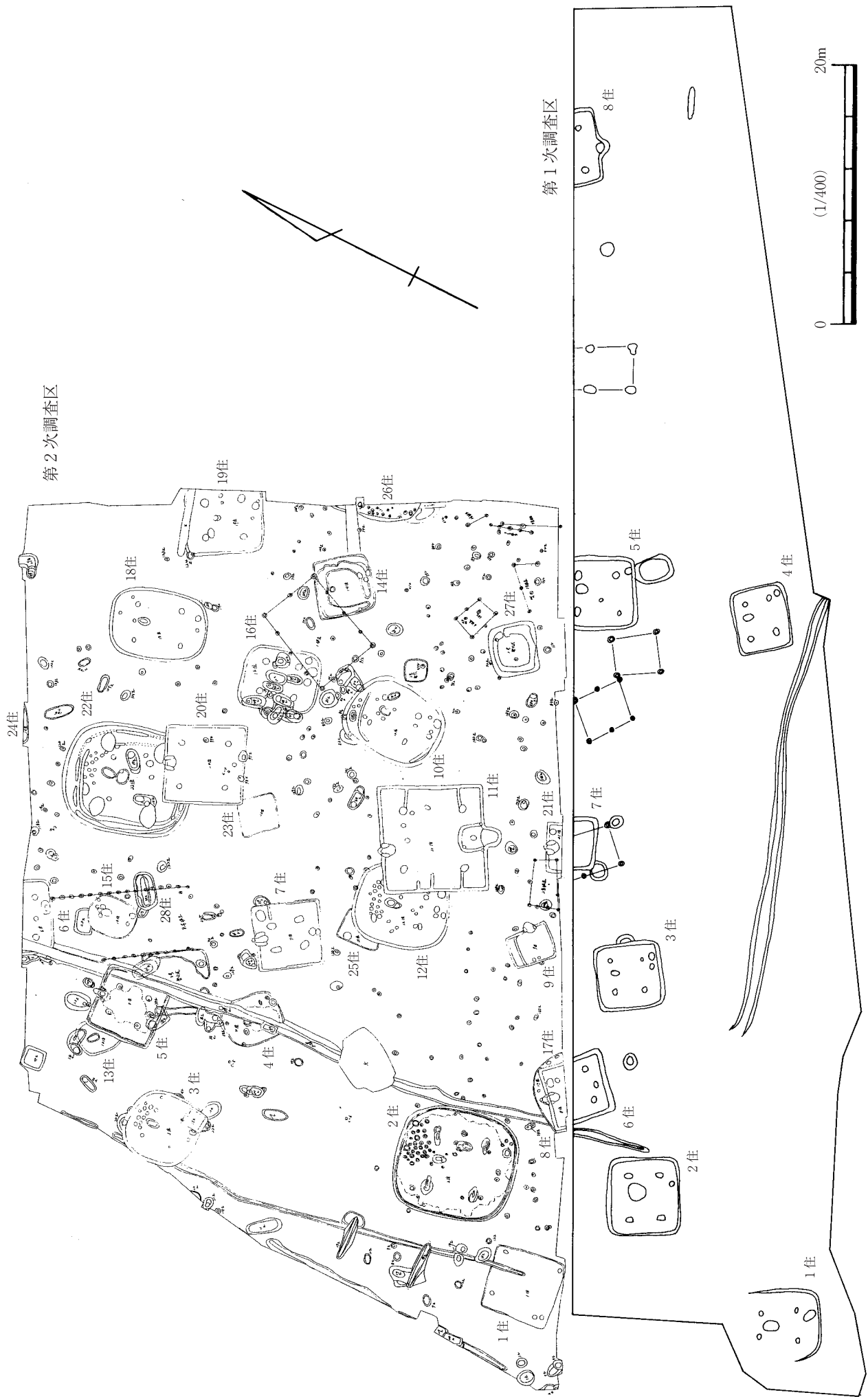
鹿島川流域の弥生中期の社会像

鹿島川流域は弥生中期から後期にかけての集落跡や方形周溝墓が多く検出された地域であり（第2図）、太田長作遺跡も時を同じくして集落が営まれた。鹿島川流域に展開した弥生社会の様相と、その一角を形成した当遺跡の位置付けを考えてゆく。

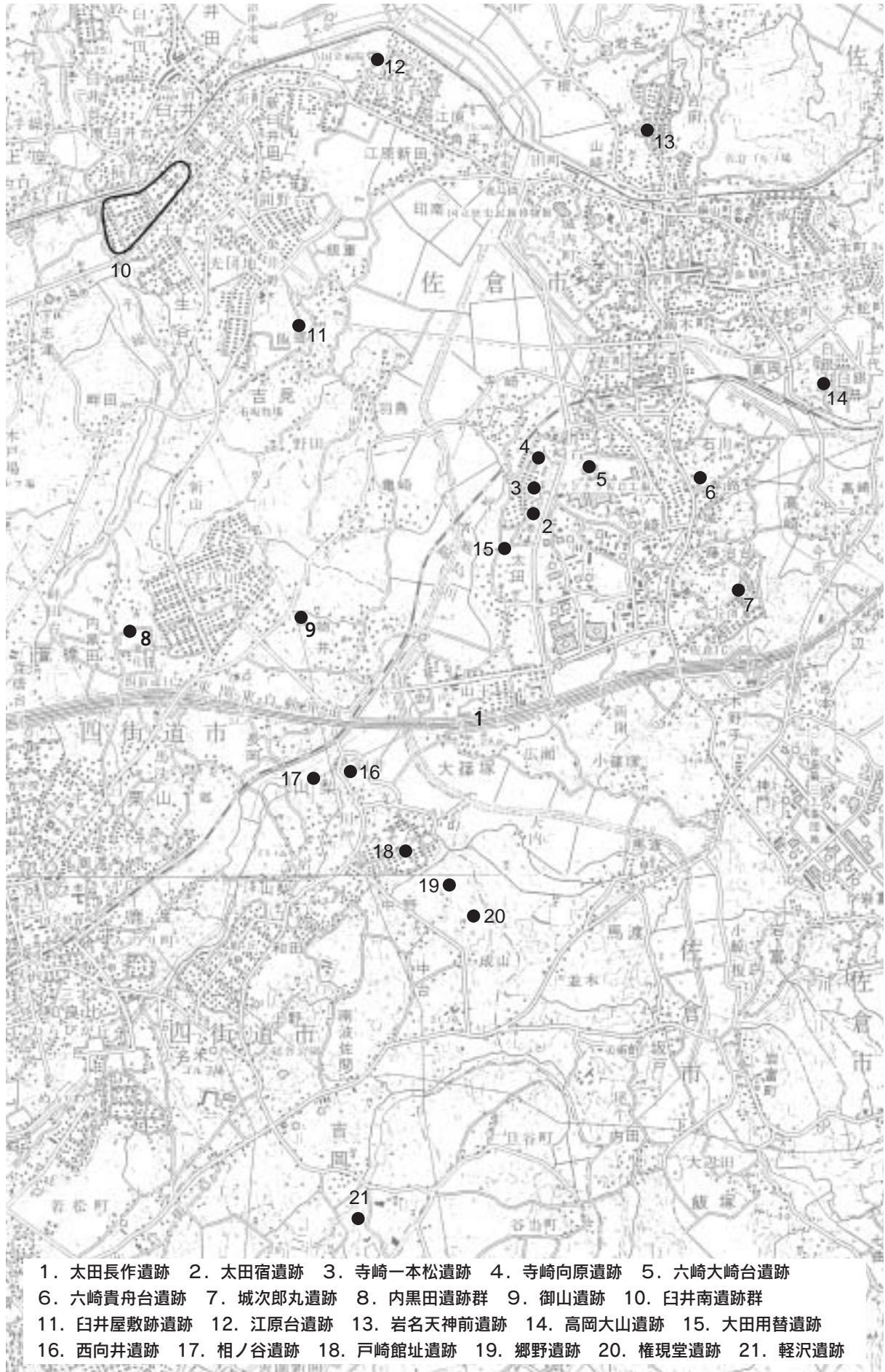
鹿島川と高崎川に挟まれたこの台地は、宮ノ台式期の**環濠**集落を検出した六崎大崎台遺跡、43基の方形周溝墓が検出された寺崎向原遺跡が位置している。共に下総台地の弥生時代を代表する遺跡である。台地の東側では方形周溝墓が検出されている六崎貴舟台遺跡などがあり、弥生時代の遺跡が比較的まとまっている地域といえる。

前述の六崎大崎台遺跡のように中期の全ての遺跡で環濠が検出されるかというところではなく、むしろ検出されない遺跡の方が多いといえよう。現在のところ六崎大崎台遺跡に匹敵する中期の環濠を伴う遺跡が周辺で認められていないことから、鹿島川流域の中心的な役割を担っていた可能性がある。その様な地域社会における拠点集落的な遺跡がある一方で、当遺跡のように中規模な遺跡が存在する。そうした違いはどの様な集団関係のもとに生じるのかということも視野に入れなければならない。但し、六崎大崎台遺跡の環濠内に展開した住居跡はいくつかの時期に分かれることが指摘されている。太田長作遺跡や他の遺跡が何時の時期と併行するのかを探る必要がある。そうすることによって並存する遺跡の対応する時期が見え、それぞれの関係を深く追求することができると思われる。

そして、弥生後期になると印旛沼南岸に集落が多く認められるようになり、それと呼応するかのようになり土器の様相に在地系の色が強くなる。鹿島川流域に根付いた宮ノ台式期の社会が変容することによって、北関東と南関東の融合という独自の後期社会を作り上げていったと思われる。



第1図 太田長作遺跡 (第1次・第2次) 遺構配置図



第2図 太田長作遺跡と周辺の遺跡